

自由研究報告

田村慶子(北九州市立大学)

12月12日(日)午前は、16人のフロア参加者を迎えて3本の自由研究報告が行われた。

第一報告は、**長谷川悟郎(桜美林大学) 会員の「カピット・バレー流域、イバンの妖怪グラシと護符信仰」**であった。この報告は、2008年から2009年の11ヶ月間に行ったカピットのロングハウスでのフィールドワークを基にしたものである。報告者は、住民の1人が一世代前にグラムシから授かったという吹き矢と一本の歯を護符として所有していたことをヒントに調査を進めて、カピット・バレー流域のイバン人村落地も一般的にはキリスト教化が進んだとされているが、若者を含めて多くの住民はいまだにグラムシを信じており、イバン人の中で受け継がれる神霊信仰がいかに根強いかを明らかにした。

第二報告は、**荒川朋子会員の「マレーシアの軍事行政—最近の組織状況とPKOセンター設立について」**であった。マレーシア軍の活動は、領土保全という狭義の防衛よりもゲリラ対策を中心とする治安維持にその力点が置かれてきた。他方では、設立期より国連平和維持活動への派遣実績を積み、近年はPKOセンターも設立した。報告者は、マレーシアは日本とは異なり、建国以来「軍事行政」「国際協力行政」「治安行政」が一体となっていることに特徴があり、さらに、時代に先駆けた公共政策の実践国でもある側面を、国連平和維持活動センターを例として明らかにした。

第三報告は、**西芳実(立教大学)会員の「災害支援と地域研究:インドネシアの事例」**であった。西会

員は、自然災害が多発するインドネシアを事例に、当該社会がこれまで抱えていた課題が災害によって見えやすくなったこと、復興・再建がよりよい社会の実現を目指す好機になったことを「災害がひらく社会」と述べ、社会の固有性や他の社会とのズレに意義を汲み取ることで理解を深める試みなどが地域文化研究に期待されていること、さらに災害対応の地域研究の可能性として、学術研究を豊かにしながら人道支援の実務の現場にも貢献する地域研究の道を考察した。

この3本の自由研究報告には特にコメントーターを置かず、報告の後はフロア参加者と報告者との自由な意見交換を行った。

フロアからは、長谷川報告に対しては、神霊信仰においてイバン人のリーダーシップはどういう時に発揮されるのか、キリスト教と伝統的信仰はどのように共存しているのか、グラムシ信仰が顕著になった背景には、政治・社会情勢の変化などの影響はあるのかといった質問が出された。荒川報告に対しては、マレーシア軍事行政の特徴と報告者が考える点の実証されていないのではないか、国防の位置づけの変化を明示すべきなどの指摘がなされ、PKOセンターの特徴は何かなどの質問が出された。最後の西報告には、情報のネットワーク作りなどで地域研究が果たす具体的役割への提案や、防衛大学でも海外に出るときは地域研究者に話を聞くことがあり、その必要性は高まっているという意見も出された。